

何ものか是れ宗教

加藤 玄智

先づ第一に實驗問題に觸れてお話致したいと思ひますが、世間で宗教と云ふものに對してどんな風にか考へて居るかと云ふことから申上げて見たいと思ひます。

或人は、宗教と云ふものは個人的のものであつて、即ちお婆さんなりお爺さんなりがお念佛を唱へ又は基督教徒がアーメンを唱へて、佛に救はれ又は神に救はれると云ふやうなことを銘々に願ふものである、それであるから宗教は個人の救ひと云ふやうなことを目的として居ると。又宗教は非常に世界的のものであつて國家と云ふものは畢竟眼中にない、基督教にしる佛教にしるさう云ふものである、宗教の本質は何うしてもさう云ふものでなければならぬ、それが國家の方面と結付くのは寧ろ宗教の方便である、宗教は世界的にして何處の國に行つても當筈まる様なものでなければならぬと。言換へれば宗教は個人的であつて又世界的のものである、隨て國家に衝突しない迄も國家を超越したものであると云ふやうな方面を非常に高調して、それに抵觸するものは宗教でない、斯う云ふ風に言つて了はうとする。さうして其方面から神道殊に神社に關する方面の神道と宗教との區別を立てやうとする人がありまして、神

道は決して此意味にて宗教でない、すべて國家的のものである、それであるから神道は宗教でない、斯う云ふ方面から宗教を觀る人があります。

併乍らそれは唯々佛教や基督教即ち吾々宗教學者が世界的宗教とか或は普遍的宗教と名を付けるものを標本として之に神道と云ふものと對照するからさう云ふことになるのであつて、もつと外の宗教を材料にして考へると宗教は決して一概にさうは云へない。無論基督教佛教の如き世界的個人的の宗教も這入り世界的宗教もあるけれども、基督教の出る前の猶太の宗教は猶太民族の信仰して居る宗教であつて決して世界的の宗教でない、基督教になつて初めて世界的になつたのであつて、其以前は猶太民族だけが奉じて居る宗教であつたのである。又佛教以前には婆羅門教と云ふのがあつたが、婆羅門教は婆羅門族といふ種族若くは印度人丈の信じて居つた宗教であつて決して世界的でない。それであるから日本には決して婆羅門教は布教されて居らぬ。それを以て觀ても分る。又古代のアッシリアとかバビロニアとか、或は羅馬とか希臘とか云ふ如き國がありまして一時非常な文明を有したのでありますが、此等の諸國に於てはやはりアッシリアなりバビロニアなり或は希臘なり羅馬なりの國々の宗教であつて決して其れが世界的の宗教ではなかつた。況や今日の野蠻民族中に行はれて居る宗教に至つては決して世界的のものではない。即ちアイヌは日本人にアイヌの宗教を布かうと云ふやうなことをしない、臺灣の生蕃は生蕃だけの宗教であつて決してそれを外に傳道しようよと云ふやうなことはしない。即ち基督教、佛教、又はモ

ハメッド教とか云ふ此等の世界的宗教に對して古代各國の人民が皆其國々に固有の宗教を有つて居つたので國家的宗教と云ふものが十分成立つて居る。それであるから宗教を一概に世界的のもの個人的のものと觀てしまふことは出來ない。

それから古代に於きましては大概何處の國でも國民と云ふものが基本になるのであつて國民單位であります。個人を單位として來たのは餘程後のことであつて、猶太などに於きましても古代の猶太民族即ち其時分はイスラエル民族と云つてをつたがその民族單位であつた。即ちエホバと云ふ神がイスラエル民族を特に保護する神だと云ふ考であつて、國家的宗教であつた、然るに個人の自覺の出來たのは、西曆八世紀頃から猶太に豫言者と云ふ一種の宗教的天才が出て段々個人的思想を鼓吹したからでありまして、猶太の宗教を取つて考へてもイスラエル民族が基本であります。其證據には、イスラエル民族は神の寵愛し給ふところの人民、その特別に選擇した選民であると、斯う云ふ風に考へてをりました。希臘あたりでも矢張古代に於ては國家が本位であつて個人の位地を認めて居らないから國家的宗教であつたのであります。それであるから宗教は世界的若くは個人的のものであると云ふ所からしてそこに宗教を片付けてしまつて其概念に合はないものは凡て宗教でないと言つて了ふことは出來ないであらうと思ふ。

又例へば佛敎の如き世界的宗教でも、日本に傳はりました後には大變國家的になつて、例へば日蓮上

人の如き御方が其教を國家的に説かれたのは言ふ迄もなく、弘法大師などの言ふて居られまする所も非常に國家的でありまして、例之弘法大師が綜藝種智院式と云ふものを御書きになつて居りますが、其中に斯う云ふことを云はれて居ります。心住慈悲、思存忠孝と、即ち慈悲が佛教の原理であつて忠孝が國家の原理でありますが此兩つを調和して居らるのであります。一方に佛教の根本主義たる慈悲に従つて安心立命をすると同時に又一方には心を忠孝に存しなければならぬと云つて居らるのであります。

佛教の中にも矢張り國家を眼中に置いて居る主義のあると云ふことは明かである。所が吾々の研究では是れが只日本に來て附焼刃で出來たのでなくして、やはり印度の古い經文を讀むと釋迦自身が、言葉使ひは多少違ひますけれどもさう云ふ方面を説いて居るのであります。それで所謂世界的宗教の中にも亦國家的方面があつて、宗教と云ふものを唯々通り一片の解釋で世界的個人的と云ふ所でそこに片を付けてしまつて、さうして例へば神道の宗教的方面と吾々が云ふものがさう云ふ側を有つて居ないから宗教でないと云ふ議論は宗教史上の事實の探究がまだ足らないと斯う言ひたいと思ふのであつて、次に斯う云ふ説もあります。宗教には未來の觀念が必ず有る、又靈魂の觀念と云ふものが必要である。

例へば眞宗の様な宗教にすれば、未來は極樂往生をする、未來は西方極樂世界に往つて佛に成ると云ふやうなことを云ふ。又如何なる宗教でも、死んで後に靈魂が極樂へ往くとか天道へ往くとか地獄へ落ちるとかいふやうなことを云つて、それが宗教の非常に大切な所である、それが無ければ宗教とは云はれ

ぬ、斯う云ふやうな點からして宗教の特色を彼の極く通俗な意味に解した未來の觀念、若くは人魂然ひとたまとした靈魂が死んでから肉體を遁れて行つて天道へ往くとか地獄へ往くとか云ふやうな觀念が宗教の最も大切な點であつて、其が無ければ宗教は成立しないと、斯う云ふ方面から考へる人があります。斯う云ふ方面から考へて、例へば孔子の教の如きは全然宗教でない、孔子も未知生、焉知死といふやうなことを曰つて居られて、孔子の教の如きは全然宗教でないと言ふ説を立てる人があります。併し是れも宗教史上の事實から言ふとあかしなことである。門外の御方は却て其方が當然のやうに御考へになるかも知れませぬが、宗教史上の事實から言ふと決して然うでない。成程知識の幼稚な民族——之を吾々も自然民族と云つて居りますが、其自然民族の範圍には、随分人魂然とした靈魂が肉體に在つて死んでから其れが遠くへ往つて所謂極樂往生をするとか云ふ考がある。昔希臘人は善人の靈の往く所をエリシオンと云つて居つた、又埃及人はアールの野と云つて居つた。エリシオンとかアールとか云ふ所へ往つて靈魂が棲まうといふやうなことを云つて居つたのでありますけれども、併ししも其れがその宗教の中心核ではないので、宗教の宗教たる所は他の方面に私はあると思ふ。其證據には、耶蘇の出ます前に猶太の地に於きましては先程申した豫言者といふ宗教的天才が輩出致しましたが、其豫言者の思想には此處で申す様な未來の觀念が一向無い。これは私が申す迄もなく西洋の學者が皆認めて居りますが、必しも人魂然ひとたまとした靈魂の考がない。イラスエルの豫言者の宗教思想と云ふものは要するに最も現世的な

ものである。此世に於て神の命に従つて正義を實行する、其處に宗教の使命がある、神は正しいものであるから吾々も依怙最負などをしないで、寡婦を苦しめたり孤兒を虐げたりするやうなことをしないで、正義を以て實行し正義に従つて行動云爲して行く、其處に神の救ひもあると斯う云ふ風なことを言ひまして、豫言者の宗教と云ふものは一向來世といふことを言はない。佛蘭西のルナンと云ふ學者は、イスラエルの豫言者は正義の觀念を以て現世に於て立たうとしてをるので神は正義で在るから又自分も正義を行はなければならぬと云ふ正義の觀念に據て立つたものであるといふことを力説して居りますが、實にイスラエルの豫言者の宗教は、其位まで進んでをるのであります、未來とか靈魂の觀念は必しも無いとは申しませぬけれども少くとも其處に重きを置いて居らぬ。宗教の中心はそこに無い。地獄の觀念とか靈魂の觀念などが段々イスラエル民族に起つて來ましたのは、紀元前五世紀以來段々あの國が弱つて、バビロニア邊りに追放されて異境の客となつて、エウフラテスの河の畔で故郷の天を望んで泣いて居つた時分から段々未來の觀念が出來て來たので、其以前には一向さういふものは無かつた。少く其其れに力を入れた宗教ではなかつたのであります、而も豫言者が宗教的天才たることは依然變はらないのでありますから、さうすると宗教の特色を最も通俗に解した未來の觀念とか靈魂の觀念に重きを置くと云ふのは必しも當を得て居らぬと思ふ。

それから耶蘇の天國の觀念に就いても矢張り同じことが言へるのであります。耶蘇は矢張り其當時の

迷信なども幾らか有つて居りましたが、耶蘇の天國の觀念には二種類あります。耶蘇が最も力を入れて鼓吹した天國の觀念は最も道德的である、所謂、

心の清き者は幸なり其人は神を見ることを得べきが故に(馬太傳)

と云ふ主義から彼の鼓吹した天國を考ふことが出来るのでそれは決して遠くに在る天國ではない、最も近い處に神を認めるので、吾々が最も清い生活をするそこに所謂神をも見ることが出来るので、其處は佛教の娑婆即寂光土の思想がやはり言葉を換へて耶蘇の教の中に説かれて居るものと思ふ。さうすると耶蘇の天國は寧ろ道德的で最も現世的であると言へやうと思ふ。

それから最も奇態に感ぜられるのは、即ち佛教と云ふ大なる宗教の開祖である所の釋尊であります。釋尊が始終靈魂のことを教へ或は未來極樂往生とか云ふことを鼓吹されたかと云ふと決して然うでない。寧ろ古い經文の證明する所に依ると、釋尊は婆羅門教の外道、即ち佛教に反對の學者宗教家ですが、其等の人々が來て、全體靈魂は有るものか無いものか、釋迦と云ふ教主が死んで了つても尙ほ存続してをるか何うかと云ふ問題を提出したに對して釋迦は何とも答へなかつた。是れが西洋の學者が佛教を研究して佛教は不可知説である、靈魂の未來などは分らないと云ふことを説く不可知説だと云つた所以であります。例へば箭喻經を讀みますと、徒らに未來は何うなるとか或は靈魂の有無などを論じて居るのは、丁度敵箭に傷いた人が、此己れを射た箭は全體何うして出來たのか、竹から出來て居るか何から出來て

居るかと云ふことを分析的に研究して居るやうなもので眞の信仰でない、眞の信仰は決してさう云ふ所には無いと云ふことを喩を以て説いて居る。さう云ふ風で、宗教の開祖釋尊でも却て靈魂問題に就いては不可知者と云はれる位にそれを高閣に束ねて居られる方面がある。未來に就いても同じことであるが、それでは釋尊の宗教の理想は何であつたかと云ふと、是れは言ふ迄もなく涅槃である。即ち佛教の最終理想である。佛教徒がいろ／＼教を聽いて何處に達しやうとするかと云へば則ち涅槃である。涅槃に達しやうと云ふのが佛教の最終理想である。其涅槃を何う云ふ風に釋尊は解して居られたか、斯う云ふと確に現世的である。釋尊は三十五歳で佛即佛陀に成つたと云ふが、其佛に成つたと云ふのは知的に云ふからである。佛陀と云ふのは宇宙の眞理を見開いたと云ふことである。知的に云ふから佛に成つた悟つた者に成つたと斯う申しますけれども、併乍らそれを他の方面から云へば、釋尊が佛陀に成られた時が即ち涅槃に入られた時であります。吾々専門家は此釋尊の生きて居る時に入られた涅槃を有餘涅槃と云ふて居るが矢張涅槃である。釋尊は實にそれに到達されたのである。即ち釋尊が佛に成つた時が釋尊の理想地に達せられた時である、即ち涅槃に達せられた時である。知的に云ふから之を佛陀に成られたと云ふけれども、之を純倫理的若くは純宗教的に申せば涅槃に達したと云はなければならぬ。その涅槃に達した状態はどんな状態かと云ふと、それは阿含經と云ふち經の中に最も明かに説いてある。

貪欲永盡、瞋恚永盡、愚癡永盡、一切煩惱永盡、是名涅槃（雜阿含）

（一八）

と是れてあります。要するに煩惱は心の垢である、精神の穢い状態である。即ち人心の私である。貪欲永く盡き、瞋恚永く盡き、愚癡永く盡き、一切煩惱永く盡くと云ふのは即ち人心の一切の垢を切り去つた状態である。釋尊が三十五歳で成道したと云ふのは即ち心の此垢をすつかり切去つて、最早さういふ垢に染まらぬことは丁度蓮花が泥水の中から出て奇麗な花を咲かしてをる様なものである、斯う云ふことを比喩を以て説いて居られますが、要するに其れが釋尊の涅槃であります。丁度耶穌が「心の清き者は幸なり其人は神を見ることを得べきが故に」と云つた其状態でありまして、耶穌の天國が現世的であると同く釋尊の涅槃も現世的である。さうして一方に於ては靈魂と云ふやうなものは人が質問しても、寧ろさう云ふことは哲學上の閑問題である宗教に直接關係がないと云つて答へなかつたと云ふ位であるから、宗教の所謂大切な所、宗教が宗教と云はれる所の大切な要素を靈魂や未來の觀念に持つて行くことと云ふことは此等の事實が許さぬであらうと思ふ。

平田篤胤は佛教を評して、佛教と云ふものが極樂往生などを説いて居るのは詰らぬことである己れはさう云ふことは大嫌いだといふことを云つて居りますが、佛教にさう云ふ方面がないではないが、それが決して佛教の大切な所でないといふことは今の話で明瞭であらうと思ふ。是れは平田翁の「伊吹於呂志」の中に書いてありまして、私も自身の著書に引いて置きましたが、非常に面白い言葉で通俗化した極樂往生などといふことを最も痛快に罵倒して居ります。なか／＼面白く書いてありますが、それが決

して佛教の本體ではない——佛教の最も好い所そのきつ粹に觸れて居らぬのは甚だ残念であります。氏は斯う云ふことを云つて居ります。

拙者は、毛虫と、佛と、死ぬことは、きついきらいぢや、夫はいかにと云に、畢には一所に寄るには違ひなけれども、暫くなりとも、妻子に別れることは、五十日百日の旅に立さへ、物うきことだに依て、その一つに寄るまでは淋しからうと思はるゝて御座る、ぢやに依て、人は養生もして、長壽を保つやうにするも、大切のことて御座る、必ず房事過ぎ、呑すぎ、また心を遣ひすぎるも、甚だ宜くないことて御座る、是につけて、世の佛好の輩が、早く死たいなど、云ふことを、能く云ふものだが、合點めかぬことて、拙者の心には、不審な事に思はるゝて御座る、夫は如何と云ふに、極樂と云ふものは、段々申す通り、一向に跡もなき所なり、よし又有るにした所が、一向おもしろくないことぢやまづ十萬億度と云ふ長道を、づう／＼行て、おほせた所が「蛙さへ重さに蓮に佛等」と云ふ口ずさびの如く、水中に生て居る蓮葉の上に、只一人つくねんとしては、さう居すまひの能い人ばかりも有るまいし、殊には此の世に残つて居る、親屬や近づきが隣を云まいものでもなく、其時もし噓でもするやうに、落もすると、極樂のどさゑもんになるから、是もこはものなり、また川柳が句に「屁をひつてをかしくもなきひとり者」是はどうも笑はれまい、そなたの尻から己がおならが出た、など、云て笑つたり談つたり、することもならず、たゞ屈まつて居ることは、何と否なことては無いか、どうし

ても速くその極樂へ行たがる人の氣が知れぬ。身よりは此世が樂みだ、夫はまづ、暮の相應にゆく人は、美濃米を飯にたいて、鱈茶漬、初堅魚に、劍菱の酒を呑み、煉羊羹でも給ながら、山吹の茶を呑んで、國分の煙草をくゆらして居らるゝ、また然いかぬ人は、ゆかぬなりに相應の樂みが有て、炭圍てたばこは呑ながらも、番茶の口切を、水道の水で煎じ呑み、鮠とにらめくらをした心持が、どうも云へぬて御座る、是をいやがつて、極樂々と云ふのは、榮耀の上の貧好み、とやらて有ませう（平田篤胤全集一、伊吹於呂志下四六）

いかにも是れは雄辯滔々として通俗化した佛教の極樂説を排斥したものであつて、どうも徳川時代のお婆さんお爺さんの佛教信仰は是れてあつたらうと思ふ。けれども佛教の開祖たる釋尊の考は、先程申した様に、貪欲永く盡き、瞋恚永く盡き、愚痴永く盡き、一切煩惱永く盡く、是を涅槃と名く、それが佛教の最終目的である、斯う云ふことを説かれるのでありますから、平田翁の批評は佛教の根本義には損益ないのであります。然うなりますと、單に斯う云つたやうな未來とか天堂極樂の様な所に宗教の大切な所を置いて、さうして、それだから然ういふことを云はないもの例へば神道の如きものは宗教でない、斯う言つてしまふことは何うしても出来ぬであらうと思ふ。所が、此方面から宗教の大切な所を見て、さうして例へば孔子の教とか或は神道のけぢめを付けやうとするのが随分世間に有るやうてありますけれども、吾々宗教の比較研究上から行けば甚だ遺憾に思ひますので、此考は事實の上から實

に不完全なものであると云はざるを得ぬのであります(未完)

我國はいともとうとし天地の

神の祭をまつりごとにて

(矢野玄道「しひがたり附録」)